『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*) 研究

井　田　恵美子

スタインベック (John Steinbeck, 1902－1968) の散文は，常に『聖書』やアーサー王と十二人の円卓の騎士の物語，そしてエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803－1882)，ホイットマン (Walt Whitman, 1819－1892) 等から受け継いだものを，反映している。『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939) も例外ではない。特に『聖書』との関係においてスタインベックは，物質文明社会に生きる素朴で平凡な現代人の生活に対応する類似性を，二千年以上も前の『旧約聖書』の英雄的な過去の人々の中に見出したのである。そして，その神話的素材を用いることによって普遍的なものを描き出した。それは，リアルでダイナミックな物語を通して劇的に展開される深い人間愛であり，人類全体を結びつける魂の存在，それを認知し実践しうる人間の偉大さとその尊厳，人間の根源的生命であった。

1

名前にキリスト (Jesus Christ) と同じ頭文字 J・C を持つジム・ケイシー (Jim Casy) は，その行動の軌跡や愛を唱える福音等にキリストと共通するところが多く，この作品においてキリスト的役割を果たしている。カリフォルニア (California) 州への移住が，ケイシーと十二人のジョード一家 (the Joads) の合計十三人で始まることは，彼らの関係がキリストと十二人の使徒であることを暗示している。しかし，ケイシーは同時にきわめて人間的で複雑な面をも備えている。彼は人間的煩悩に苦しみ，そこから逃れるため山に入って瞑想的な生活を送り，自然と一体になる境地に到達する。そして，そのことから『たぶん人間全体が一つの大きな魂を持っていて，一人一人がその魂の一部分なのだ』("'Maybe

all men got one big soul ever' body's a part of")[1]という啓示を受けたケイシーは，神秘的感情を抱き魂の神聖さに目覚めるのである。そして，すべての人間に対し愛を持つ彼は，『胸が張り裂けそうになるほど人間を愛し人間の幸福を願う』("'love'em fit to bust, an' I want to make 'em happy,'")[2]のである。

ここで記憶すべきことは，愛そして人類全体を結びつける魂の存在を認めるケイシーの福音が，彼の瞑想的生活から移住民の行動生活の渦中に身を投じることによって成就されるということである。彼は，積極的に移動労働者の側について彼らと共に働く。小説の過程で学び成長するのである。彼の成長はまた小説の多くの人物の成長であり，彼の哲学は民衆の哲学である。小説の初めから，彼は土地を追われた移動労働者と共にいることを望み彼らのために何かをしたがっている。事実，彼はジョード一家の人達にカリフォルニアへ連れて行ってくれるよう懇願する。彼は移動労働者と共に旅をしながら事態を理解しようとする。ケイシーのこの呼吸し参加しようとする態度は，小説の後半で彼が示す成長を予期させるものである。

ケイシーは，ジョード一家という集団の中に入り共に行動する。おばあさん（Granma）からせがまれて，

> "... But when they're all workin' together, not one fella for another fella, but one fella kind of harnessed to the whole shebang —that's right, that's holy ..."[3]

と食前の祈りをするのは，彼の行動の第一歩である。それはすべての人間の統一した精神に神聖な精神を認めることであった。そして

> "... There was the hills, an' there was me, an' we wasn't separate no more. We was one thing. An' that one thing was holy."[4]

というケイシーの思想には，超越主義的愛，深い人間信頼という独特なかおりがある。

ところで，もしケイシーがジョード一家という小宇宙的集団の一員として永久に残っていたならば，彼の小説における役割は限られたものとなっていたであろう。ケイシーは，小宇宙的集団の中に身を投じることによって全くの思索的人物から実践的人物となるが，彼の福音がはっきりと現われた時ジョード一家から離れて行くのである。ケイシーは，ジョード一家の解体を防ごうという人間愛から，自ら争いを引き受ける。そして，ジョード一家という小宇宙から離れたケイシーは，人類という大宇宙の代弁者となるのである。

争いの責任を一身に引き受け逮捕されたケイシーは，監獄の中でさらに実践的な発展を遂げる。彼は窮乏のために物を盗み投獄された人々を見て，すべての問題の元は貧窮にあることを悟り，囚人達が団結して腐った食事を取り替えさせた経験から，一つの大きな魂があるという彼の福音は民衆の行動の中で初めて意味を持つことを学ぶのである。そして，最後には彼は果樹園労働者のストライキのリーダーとなって死んでいく。このストライキのリーダーとなる過程で示される彼の現実的な成長は，彼の持つ人間と自然についての神秘的感情と不可分に結合している。誰もが一つの大きな魂の一部であるというケイシーの重要な思想は，人々は一緒に団結して働くべきであるという彼の信念の基礎となっている。彼の協力と団結の考え方は政治的なものではなく，人間はみんなお互いにつながっているという神秘的感情に由来している。そして，彼が感じる自然との一体感における人間と自然の有機体的見方も，それ自身社会的でも政治的でもない。ただケイシーは，彼が身近に見たり聞いたりすることが神聖な統一すなわち彼が宇宙に感じとる一種の秩序を壊すことになる時は，平気ではいられなくなるのである。これが，旅をしている時そしてカリフォルニアでケイシーに起こったことであり，彼は移動労働者の生活の苛酷な現実に反応を示すのである。

ケイシーが示す一つの大きな魂そしてすべての人間への愛という新し

い福音には，真正のキリスト教精神の反響がある。それは，彼の最期の場面に象徴的に示される。ケイシーはストライキのリーダーとして残忍な死を遂げるが，殺される時，懐中電燈の光がパッと彼を照らし，『あいつだ，あの頭のてらてらした野郎だ』(“‘That's him. That shiny bastard’”)[5] という鋭い声がかかる。頭が禿げ上がり光っているケイシーのこの容貌は，キリストが「光」「世の光」にたとえられることを考えると，まさにキリストそのものを思わせるのである。そして死に直面しての『おまえ達は自分で自分のしていることがわからないのだ』(“‘You fellas don' know what you're doin.’”)[6] という彼の言葉は，キリストが十字架にかけられた時「父よ，彼らをお許し下さい。彼らは何をしているのかわからずにいるのです」(“Father, forgive them ; for they know not what they do.”)[7] と語った言葉を言い換えたものである。キリスト的展開が，彼の死に際して成就したことを暗示させるのである。

ところで，ケイシーの思想と同じ本質を人生経験から体得している人物が，トム (Tom) のおっかあ (Ma) である。小説の初めにおいてケイシーが行う，自然と合一した精神に一つの大きな魂の存在を訴える一風変った食前の祈りを，彼女は問いかけ探り理解しようとする。「まるで彼が突然一つの霊になったかのように，もはや人間でなく地底から響いて来る声であるかのように」(“as though he were suddenly a spirit, not human any more, a voice out of the ground.”)[8] 彼を見つめる彼女は，彼の思想を直観的に肌で理解しているのである。彼女は，無意識のうちにケイシーと同じ方向で働き，家族という集団をまとめ，家族が生きていく上の中心となっていく。彼女は母なる大地として，大きな人間像として描かれている。とりわけ，家族のとりでとしてジョード一家の旅を根底から支え，何よりも一家の団結を重んじて家族の崩壊を防ぐために全力を尽くすことは重要であり，その姿は忘れ難い印象を残す。

一家の中心としてその団結に貢献するおっかあは，彼女の人生経験で育てられた的確な直観的判断に基づいて，時に強靱とも言える意志と行動を示す。特に家族が弱くなりかけた時，彼女の力は充分に発揮される。

カリフォルニアのオアシス (oasis) であるウィードパッチ (Weedpatch) の国営キャンプにおいて，「安心であるという幻影」(“the illusion of security”)[9] が一家の男達を弱くしている兆候に早くも気づいたおっかあは，彼らの怒りの精神をよみ返らせる。国営キャンプがいかに良い所であろうと出発しなくてはいけないと主張し，『おまえは勇気をなくす権利はない。この家族は今だめになりかけている』(“‘You ain’t got the right to get discouraged. This here fambly’s goin’ under.’”)[10] と男達に訴える。めったに憤激を見せないおっかあが，おやじ (Pa) を怒らせ勇気を持たせようとする願いを持ったのである。それは，母として女としての賢い熟考された判断であった。しかも，彼女の行動は思索の結果でなく，困難に黙って悩む年月を体験したことから生じている。黙って苦難を受けた経験から，彼女は実際の生活実践に有用か否かを考える実用主義的見地に至り，徹底的に現実を尊重し直観的本能的に判断を下し行動する。このようなおっかあは，男達が再び責任を引き受けるようになるまで家族という集団を維持し続けることができるのである。

苦難の年月の中の様々な経験からジョード一家を支えていくおっかあは，一家の中心にふさわしい広く美しい人間愛を持っている。特に彼女は，貧しい者の気持ちがよくわかる。小説の最初の方で，彼女が二人の貧しい者つまりトムとケイシーを部屋へ誘い入れる場面である。

> “Let ’em come,” she said. “We got a’plenty. Tell ’em they got to wash their han’s. The bread is done. I’m Jus’ takin’ up the side meat now.”[11]

さらにウィードパッチの国営キャンプでは，シチューのにおいに誘われて来た子供達を，彼女は食物が充分あるわけでもないのに追い出さないのである。このような彼女の行為は人間愛の実践であり深い人間信頼につながる。そして，おっかあの次の言葉は，深い人間信頼を意味すると共に「詩篇」(“Psalms”) の「牧の民」(“the people of his pasture”)[12]

につながるイメージを持つ。

> "You got to have patience. Why, Tom—us people will go on livin' when all them people is gone. Why, Tom, we're the people that live. They ain't gonna wipe us out. Why, we're the people—we go on."[13]

ただしこの言葉は，単なる「詩篇」の復誦ではない。それは，ケイシーそしてトムを理解したおっかあの経験から得た知恵の言葉としての重みをもっている。彼女が家族の守護神として苦痛と苦悩を踏み越えてきた結果の言葉なのである。そして彼女の姿は，限りない強さと優しさを秘めた永遠の母親像なのである。

おっかあの人間愛は，娘のロザシャーン(Rosasharn)に受け継がれる。最後の象徴的場面で，ロザシャーンは，洪水のさ中の丘の上の納屋で見も知らぬ瀕死の男に母乳を与える。

> "There !" she said. "There." Her hand moved behind his head and supported it. Her fingers moved gently in his hair. She looked up and across the barn, and her lips came together and smiled mysteriously.[14]

この彼女の授乳は，汝が欲するところを他人に与えるという隣人愛の象徴である。そしてそれは，晩餐式で「取って食べよこれは私のからだである」("Take, eat ; this is my body")[15] とパンを与え，「私は命のパンである」("I am that bread of life")[16] と言ったキリストの実現である。つまり彼女の授乳は，人間が自らの血を他人に与えるという本源的人間愛，理性を超越した神秘的な崇高なものであり，小説全体が神話的段階にまで高められるのである。

なお，この姓名不詳の男は，ジョード一家のおじいさん(Grampa)の実現である。『ぶどう畑から大きなぶどうを一房ちぎるか何かしてそれを

顔に押しつけ汁をあごからたらすつもり』(“‘Gonna get me a whole big bunch of grapes off a bush, or whatever, an' I'm gonna squash 'em on my face an' let 'em run offen my chin.’”)[17] とカリフォルニアに夢を持ち，豊饒の地を求めていたおじいさんは，夢見ていたあこがれの果樹園を見ずに死亡する。しかし，その死に対する生の回復がロザシャーンの授乳によって実現するのである。彼女の乳房には，「雅歌」(“Song of Solomon”) において「あなたはなつめやしの木のように威厳があり，あなたの乳房はその房のよう」(“This thy stature is like to a palm tree, and thy breasts to clusters *of grapes*.”)[18] と豊かさのイメージが与えられている。そして，まさにその豊饒を与えられている，飢え死にしかかった男として，おじいさんは復活しているのである。この意味において彼女の授乳は人間の永却不滅，生命の持続の象徴でもあり，ロザシャーンは永遠の母親につながる聖母マリアとして我々の心に忘れ難い印象を残すのである。

2

スタインベックは，「生の不滅」を描く作家である。『怒りのぶどう』の根底には，どのような逆境にあっても生き続ける人々のたくましい生命力が息吹いている。それは，様々な動植物の姿によっても提示される。犬，猫，蛇，兎から地鼠，雑草に至るまでこの作品に登場する各種の自然の生命体は無数で，それらは，ジョードー家を始めとする人々と多様にかかわり合いながら，生命の重要性，その永続と不滅に厚みを与えている。特に，「土亀」(“the turtle”) は最も意図的効果的に使われている。それは，ひたすらに歩き続けながら同時に植物の種子を運び，他の生命の維持を発展にも貢献していく。実際，動物の中でも亀ほどねばり強いものはない。踏まれても蹴られても，またどんな耐え難い苦難に合おうと着実な歩みを続けていく象徴である。

トムが「土亀」を家に持って帰ろうと拾い上げた時でさえも，それは逃れて遂に歩み続けて来た方向へと歩みを続ける。まさに，移住民達が

抵抗し難い力に対して抵抗しどこまでもいつまでも動き続けるという不屈の生命を象徴している。しかも，家族が彼らの土地を離れると知ったトムが亀を離すと，亀は南西の方角へ歩いて行くのである。南西の方角の指す地はカリフォルニアであり，亀を駆る生命力がジョードー家をも動かすことが暗示される。この亀と移住民の象徴性の証明は，ケイシーが，動き続けることに屈しない亀の努力を主張する時，完全となるのである。

> "... Nobody can't keep a turtle though. They work at it and work at it, and at last one day they get out and away they go—off somewheres. ..."[19]

この姿は，生命の不滅を暗示していると言えよう。

このような肯定的に表わされる生命力は，冷酷で非生命的なものとの対比によって一層明らかとなっている。小作人達を土地から追い出す「銀行」や「土地会社」は「怪物」("monster") と呼ばれる。それらは「機械」であって血の通った自然な生き物ではない。「トラクター」("tractor") もやはり冷たい機械であり，土地を耕すがしかし土地から人々を追い払う。それは巨大な物質世界の象徴であり「ししっ鼻の怪物」("snub-nosed monster") である。しかし，それは昼間は怪物であっても夜になると生命のぬくもりのない単なる静止した機械にすぎなくなる。「トラクターのモーターが止まる時，それはその材料の原鉱と同様に死んでいる」("when the motor of the tractor stops, it is as dead as the ore it came from.")[20] のである。

こうした中でトラクターを運転する者も，もはや自然な人間ではなく「機械人間」("machine man") である。その他にも，小作人に立ちのきを言い渡す地主の代理人，国道沿いのキャンプの持ち主，フーヴァーヴィル (Hooverville) へ人夫集めに来る請負人，「オーキー」("Okie") 達を町へ入れまいとする自警団員，大農場の権益を守る保安官補等は，非

生命的人物である。彼らが，大地主や銀行の大資本の側につき，利己的で冷たい非生命的存在として表わされることは，注目に値する。彼らは一種の生命破壊者の役割を果たす。彼らが引き起こす様々の事件，例えば国営キャンプへの策謀，フーヴァーヴィルでの傷害事件やその焼き打ち，ケイシーの殺害等は，破壊，破滅の道に通じるのである。

しかし，このような生命の破壊者の圧迫を受けながらも，なお全体として生命体は生き続けることが主張されている。それは，おっかあが口にする「私達こそ人間なんだ」（“We are the people”）という言葉によっても明らかである。彼女のこの言葉には，不安な逃亡の時代のイスラエル人（the Israelites）を支えた「選ばれた民」（“the chosen people”）の信念の反響がある。この「選ばれた民」の観念は，小説の中に浸透し移住民が生き続けることの可能性の暗示となっている。移動労働者達は，ちょうどイスラエル人と同じように，約束の地を求めて苦難の旅を続けることに「選ばれた」のである。そして「選ばれた」という観念は，選ばれたからこそ苦脳を乗り込えみごとに生き抜くという信念につながるのである。

ところで，批評家レスター・ジェイ・マークス（Lester Joy marks）は，『怒りのぶどう』におけるスタインベックの人間観について次のように述べている。

> ... Steinbeck views man as a triple thing—an individual, a part of a specific group, and a part of macrocosmic humanity.[21)]

人間は，一個人として主体性を持っていなければならないと同時に，ある集団そして大宇宙の一部なのであり，一人では生きられないという主張がなされている。したがって，人々が生きていこうとする時，そこには必ず人間の深いつながりが生まれる。しかも，それは，ジョード一家というある家族単位がばらばらとなり経済的精神的に衰退していく中で生まれていることに注目しなければならない。

小説の進展とともにジョード一家の境遇は逼迫する。そして，彼らの衰退の様子はその構成単位そのものにも現われ，十三人いた一家は，死亡した者，結婚を含め行方不明となる者を引くと，小説の終りでは六人となる。今や家族単位自体が解体してしまい，集団としての一家は崩壊の状態にある。しかし，彼らの衰退と並行してより大きな集団が形成されていくのである。ウィルソン一家（the wilsons）やウェインライト一家（the wainwrights）等との結びつきが生まれ，彼らはジョード一家と家族同様につき合う。ジョート一家の祖父はウィルソンのテント内で死亡し，ウィルソンの毛布に包まれて埋葬される。しかも，祖父と共に埋められる碑文は，ウィルソンの聖書を破いた余白の紙片に書き留められる。それは，家族の出産や結婚，死亡を記入するページである。したがって，その紙片をジョード一家の祖父と共に埋葬することは，祖父そしてジョード一家を受け入れることを示すと共に，ジョード一家とかウィルソン一家というお互いの家系を守り続けることを放棄し，それぞれが親族関係になったことをも示すのである。

苦境におかれればおかれるほど人間の結びつきは強くなり，最後の第30章ではジョード一家とウェインライト一家という「貨車の中の二つの家族は一つになる。」（“the two families in the car were one.”）[22] また，ウィードパッチの国営キャンプでは「この作品で最も忘れ難い美しい場面」（“one of the most beautiful scenes of the book”）[23] が展開する。キャンプに着いた翌朝，トムはその朝知り合ったばかりのティモシー（Timothy）の家の人達から朝飯をふるまわれ，その上ティモシーに誘われるまま小農場の土管埋めの仕事にまでありつくのである。

これらの人間の強い結びつきの様子は，小説の各所で繰り返される。一つの家族が違う家族と密接になり結びついて一つのつながりが生まれ，「私」（“I”）という観念から「私達」（“We”）に変化していく。そこには人間愛が育ち，人間の強い結びつきが徐々にそして確実に広がっていくのである。

3

『怒りのぶどう』を通して，スタインベックは，人間がいかに苦難の途を歩もうと，物質文明によって人間の神秘的とも言える原始的な人間性をそこなわれることなく，希望の土地，理想の世界に前進していく原動力を我々に与えている。それは，ロザシャーンの最後の授乳の場面において象徴的であったように，お互いに一切のパンを一杯のコーヒーを共に分かち合うことでもある。しかも，これらの人間愛は，移住という受難の旅をもって初めて実現されたのである。ケイシーは，積極的に移住民と交わることによって人間愛の実現を可能にする。トムもまた，苦難な移住生活における体験から様々なことを学びとり，人間愛の実現に足を踏み出すのである。そして，ジョード一家という小宇宙の世界から，人類全体という大宇宙へと視野を広げた時，この『怒りのぶどう』は，アメリカの一地方に起こったことを遙かに越えて，我々人間全体に力強い勇気を与えるのである。

また，スタインベックは，「生の不滅」を語る作家である。生あるものは，なかなか死に絶えない生命力を持っている。人間はつまずきながらも少しずつ前進する。完全に一歩後退することはない。この生命の偉大さ，人間の能力について，スタインベックは次のように描いている。

> . . . man, unlike any other thing organic or inorganic in the universe, grows beyond his work, walks up the stairs of his concepts, emerges ahead of his accomplishments. This you may say of man—when theories change and crash, when schools, philosophies, when narrow dark alleys of thought, national, religious, economic, grow and disintegrate, man reaches, stumbles forward, painfully, mistakenly sometimes, Having stepped forward, he may slip back, but only half a step, never the full step back.[24)]

ここには，人間の生命は，物質的な存在を超えて意味を持つというスタインベックの確信がある。彼の人間観は，人間は宇宙的な人類の一部として魂を分け合っているということ，一個の人間として主体性を持っていなければならないということ，そして集団の中の人間でなければならないという三重のものであった。したがって，一個の人間として自らの意志を持たず主体性もなく資本家たちの道具となった人間たちは，宇宙的な人類の一部としての生命を与えられることができない。これに対し，ケイシーやトムそしておっかあ等を代表とする移動労働者は，各々が主体性を持った宇宙的な人類の一部であり，宇宙的な人類の一部である人間は，自分の宇宙における姿を認知し高めていくことができるのである。

社会，国，世界には，何時の世にも苦難の途が絶えることはない。我々，現代人は，機械文明と物質社会の爛熟期に生きており，その社会はますます組織化され，巨大に複雑になっている。このような社会の中で現代人は，困惑し生きる方向を見失い虚無的に落ち入る傾向がある。こうした現代人に，スタインベックは人生の迷路を通り抜ける方法を登場人物の言動を通して示してくれているのである。

NOTES

1) John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*, (Penguin Books), p.24.
2) *Ibid.*, p.24.
3) *Ibid.*, p.88.
4) *Ibid.*, p.88.
5) *Ibid.*, p.426.
6) *Ibid.*, p.426.
7) *The Holy Bible,* "Luke," 23 : 34.
8) Steinbeck, p.89.
9) Lester Jay. Marks, *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck* (The Hague : The Mouton, 1969), p.73.
10) Steinbeck, p.386.
11) *Ibid.*, p.79.
12) *The Holy Bible,* "Psalms," 95 : 7.

13) Steinbeck, p.310.
14) *Ibid.,* pp.501—502.
15) *The Holy Bible,* "Matthew," 26 : 26.
16) *The Holy Bible,* "John," 6 : 48.
17) Steinbeck, p.90.
18) *The Holy Bible,* "Song of Solomon," 7 : 7.
19) Steinbeck, p.21.
20) *Ibid.,* p.125.
21) Marks, p.74.
22) Steinbeck, p.480.
23) Peter Lisca, *John Steinbeck* : *Nature and Myth* (New York : Thomas Y. Crowell, 1978), p.104.
24) Steinbeck, p.164.